発掘調査の概要

石神遺跡の調査（飛鳥藤原第145次）

都城発掘調査部では、昨年10月から石神遺跡の発掘調査をおこなっています。今回の調査は石神遺跡北方における土地利用の実態解明を目的としています。そして、今回は特に石神遺跡の北限とされる「阿倍山田道」の検出が期待されました。

「阿倍山田道」とは、『日本霊異記』や『万葉集』にも登場する古代の幹線道路の一つです。古代の大和盆地には、上ツ道・中ツ道・下ツ道という３本の南北道路と横大路という東西道路が走っていました。このうち上ツ道の南延長部分で飛鳥盆地を東西に横切り、下ツ道と交差する道が阿倍山田道です。この道路は、飛鳥の都への北からの入り口であり、飛鳥地域全体の空間配置においても重要な位置を占めていたと考えられます。

しかし、この阿倍山田道は、現在の飛鳥資料館の前を通る県道付近に位置が想定されていましたが、具体的にどこを通っていたのか、どのような規模でいつ頃に作られたのか、など詳しいことについては不明で、発掘調査による実態の解明が期待されていました。

発掘調査の結果、古墳時代以降の数度にわたる空間利用の変遷を明らかにするとともに、７世紀後半以降の阿倍山田道を検出することができました。

検出したのは、阿倍山田道の南側溝と考えられる東西溝です。これには２時期あり、７世紀後半の天武朝のものと７世紀末の藤原宮期のものがあります。

藤原宮期の東西溝は南北に並行して２条あります。1990年度に今の調査区よりも北側で行った調査では同じく藤原宮期に属する東西溝が検出されており、これは阿倍山田道の北側溝であると推定されています。そこで、この溝を北側溝とし、今回検出した東西溝のうち北側の溝を南側溝とすると、藤原宮期の阿倍山田道の規模は路面幅が約18mで、側溝間の距離は21～22mであったと推定することができます。この規模は藤原京の中では大路クラスに匹敵します。

この阿倍山田道の検出を目的とした発掘調査は、1988年以降、数回にわたりおこなわれてきました。しかし、これらの発掘調査の結果、道路に関連する可能性がある遺構は検出されましたが、いずれも断片的なもので、位置や規模を確定することはできませんでした。今回、阿倍山田道の位置や規模を明らかにできたのは、このような調査・研究の積み重ねがあったからです。継続的な発掘調査の必要性を痛感しました。

なお、３月31日に現地説明会を行いました。約1,100人の方々にお越しいただき、飛鳥に対する皆様の関心の高さを目の当たりにしました。

・・・さて、調査最終盤に至って、７世紀後半よりも古い時期の阿倍山田道の存在も明らかになりつつあります。また、道路の基礎工事として、基底部に木の枝や葉を敷く、敷葉工法という古代の土木工法が用いられており、この枝葉の上に土を積み上げて道路を造っていたことも分かってきました。

今回の発掘調査によって阿倍山田道の姿をおぼろげながらもつかむことができそうです。今後の調査・研究にご期待下さい！

（都城発掘調査部　小田 裕樹）

調査区全景（東から）

道路下部に敷かれた枝や葉（東から）